

## 博士学位論文審査要旨

申請者：趙倩倩（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程在学）

論文題目：日中動物説話・伝承の研究—比較考察の見地から—

申請学位：博士（学術）

審査員：主査 堀 誠 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（学術）  
副査 大津雄一 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（文学）  
副査 内山精也 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（文学）  
副査 相田 満 国文学研究資料館・総合研究大学院大学文化科学研究科  
准教授 博士（文学）

### 1 本論文の目的

唐の李白は「春夜宴桃李園序（春夜 桃李園に宴するの序）」の冒頭に「天地者万物之逆旅（天地は万物の逆旅）」と詠じている。このありとしあらゆる物が身を寄せる「逆旅」（旅籠、旅館）のごとき天地にあって、人間は多くの動物たちと関わりながら長い歴史の時を刻んできた。なかんずく家畜となった動物は、人間の身近な存在として、他の動物よりもさまざまに接触・交流することが少なくなく、人間の乗り物として、労力として、食物として、大いに人間に寄与貢献してきた。その動物の行動を目にしつつ日々暮らす中で、さまざまな話も誕生する。論文申請者は、その動物の説話や伝承は人々の日常生活、信仰や崇拝、審美心理なども反映して、文学はもとより生活史や文化史的な資料としても興味深いものを含み、往時の人々の生活を知るための一つの鍵ともなると考えている。

日本と中国とは一衣帯水の隣国であり、古くから文化の交流があったことは周知のことである。動物説話や動物伝承もその例外ではなく、日本の場合、人の往来や漢籍の伝来によって、中国の多くの動物説話や動物伝承が知識人や民間の人々にも知られて、日本の風土の中で受容結合しながら更に展開してきたことが想起される。本論文は、日本に行われる動物説話や動物伝承の研究に端を発し、その源泉を探るべく中国の説話や伝承との比較考察を展開する中に生じた五つの動物に関するテーマを考察することを主要な目的とする。

その考察は、日中の動物に関する、文字で相承されてきた「説話」、ならびに口で伝えられ文字化した「伝承」を対象として展開する。動物としては、「六畜」と称される六種類の家畜の中から、「牛・馬・羊・鶏・犬」の五つの動物を対象に選んでいる。いずれも十二支の中の動物でもあり、古くから人間の生活と深い関わりをもってきたことはいまでもない。動物は崇拝や信仰の対象ともなる場合もある。単なる文学的研究にとどめるべきではなく、民俗学などの方法も視野にいれた総合的な考察を意図するところには、中国からの留学生として真摯に日本と中国を見つめる深い眼差しと思考がうかがえる。日本人が動物に抱く印象や考え方には、中国的なものが反映されるか。漢籍の伝来によって、中国文化はいか

に日本に影響を与え、説話や伝承が日本の風土でどのように変容したか。これらの疑問を抱きながら、日中の古典的な世界を中心とする牛・馬・羊・鶏・犬の説話と伝承に対して、時代とジャンルを超えたさまざまなテーマを発想して多様な切り口を用意した論考を展開する。

## 2. 本論文の構成

本論文の構成は、次のとおりである。

### 序言

本章で扱う説話・伝承とは

動物説話・伝承を選んだ理由

牛・馬・羊・鶏・犬を選んだ理由

### 第一部 牛をめぐる論考

第一章 『太平広記』所収「金牛」「銀牛」故事考

第二章 日中占墓故事考—「牛眠地」「馬冢」等と菅原道真の墓所—

### 第二部 馬をめぐる論考

聖徳太子の黒駒説話について—中国文献の受容と為政者像の形成—

### 第三部 羊をめぐる論考

第一章 『今昔物語集』震旦部卷九所載の羊転生譚の特徴について—説話類型の観点から—

第二章 『今昔物語集』震旦部卷九所載の羊転生譚における「孝養」の意味

### 第四部 鶏をめぐる論考

第一章 鶏鳴と吉凶禍福—中国文学と関わりながら—

第二章 鶏鳴と太陽—記紀の「長鳴鳥」をめぐる—

### 第五部 犬をめぐる論考

第一章 水天宮信仰と中国（1）—瓢箪と水を中心に—

第二章 水天宮信仰と中国（2）—瓢箪と犬と誕育—

### 結語

本論文の考察について

今後の展望

[初出一覧]

[主要参考文献一覧]

### 3 本論文の概要

#### 序言

考察の対象となる牛・馬・羊・鶏・犬の五つの動物は、いずれも十二支の動物でもある。人間はこれらの動物を目にして想像の翼を広げたが、日本と中国とは古くから文化の交流があったことは周知の通りで、動物説話や動物伝承もその例外ではなかった。日本に知られることとなった関連の説話や伝承は、日本の風土の中で多様に受容されて展開する。その日本における中国受容のありようを比較考察の見地から探訪する上での指針を述べる。

#### 第一部 牛をめぐる論考

##### 第一章『太平広記』所収「金牛」「銀牛」故事考

中国の北宋時代に編纂された『太平広記』の巻四百三十四「畜獸一」「牛」に収載される「金牛」（晋の地理書『湘中記』を引く）と「銀牛」（唐の『酉陽雜俎』を引く）の二話は、多少の異同があるが、「人が牛とともに山に入って姿を消す」、「牛の糞が金や銀などの財宝に化す」という共通のモチーフをもち、中国の財宝譚における一つの類型的な話型と位置づけ得るものである。そのモチーフの源泉を訪ね、文学風潮や人々のもつ牛に対するイメージを探りながら、話譚が生まれる道のりを検討した。

「金牛」の田父や「銀牛」の神の使者が牛とともに山で姿を消すことから想起されるのは、古く老子が函谷関を出る話やその化胡説でもある。青牛が引く車に乗って関を出る老子は、『神仙伝』には「崑崙に昇らんとす」と記す。崑崙は名高い仙女の西王母が住むという西域の仙山に他ならない。その仙人世界に導くがごときイメージは、山に入った者が姿を消すという「金牛」や「銀牛」の神仙的なモチーフの源流かとも思われる。

また「牛の糞が金や銀などの財宝に化す」モチーフは、『芸文類聚』巻九十四と『太平御覧』巻九百「牛」下に引く『蜀王本紀』に載る、秦の恵王が蜀を討伐しようとして五頭の石牛を作り、その後ろに金を置いておいた話に源泉が求められる。トロイの木馬に類する中国の石牛の話題であり、三国から東晋に成った『華陽国志』にも記載される。いわゆる「金牛」「銀牛」の財宝譚は、牛の毛色と関わって「金」のモチーフから「銀」のそれが派生したものと推測される。

「金牛」「銀牛」の話は日本に受容されたか。書承の関係から考えてみると、『太平広記』の日本伝来の時期は明確ではなく、引用書の中で『酉陽雜俎』の舶載は『日本見在書目録』によって確認されるが、「金牛」「銀牛」の条文の具体的な引用も確認できない。

老子の特徴となる乗物を引く牛からは、道真の墓所を牛車の止まった場所に決めた話が想起される。道教で尊崇される太上老君老子の牛が、天神たる丑年生まれの菅原道真に付会されたとの推論も生まれる。さらに牛と墓所との関わりとなると、「牛眠地」などの「占墓」の話との強固な関わりが想起される。

##### 第二章 日中占墓故事考—「牛眠地」「馬冢」等と菅原道真の墓所—

「占墓」とは、墓所を造るべき地を占い選ぶことをいった語であり、『南史』「宋本紀上」には「時有孔恭者、妙善占墓（時に孔恭なる者有り、<sup>たく</sup>妙みに占墓を<sup>よく</sup>善す）」と記す。

中国には、死者を吉地に葬れば子孫に幸運をもたらし一家を繁栄させるとの信仰が古くからあり、人々は祖先や両親の墓所を決める際に「占墓」を行っていたことが知られる。

墓所を選ぶ話は古く『後漢書』卷四十五の袁安伝に認めるのをはじめ、漢の高祖劉邦に仕えた夏侯嬰（滕公）にも、死後あるいは生前に馬の不思議な行動によって墓所を定める「馬冢」の話が漢の『西京雜記』や晋の『博物志』、唐の『独異志』、幼学書の『蒙求』にも収められ、広く知られた。また、詩人として名高い陶淵明の曾祖父の陶侃には、『晋書』卷五十八「周訪伝」や『志怪』に、父母の葬儀に際して行方知れずとなった牛を探しているとき、見知らぬ老人が前方の牛が眠っている窪地に葬れば、位は人臣を極めると教えたこと記す。この「牛眠地」と称される話は、馬の不思議な行動の話と相俟って、占墓に関する動物の靈驗譚と見られる。

菅原道真の棺を載せた多力の「つくし牛」が動かなくなり、その場所を墓所に定めたとの話が、『北野天神縁起』建久本にはじめて確認できる。道真が没した延喜三年（903）からおおよそ二百年後のことであるが、前尾繁三郎『十二支攷』第一卷（子・丑）「中国の故事に由来するわが国における牛の伝説と俚諺」には、「もとより、牛の眠っていた所と牛の止まった所との違いはあるし、父を葬って子が人臣を極めたのと、位人臣を極めた人を葬って、のちに靈が天神となるのとはかなりの差異がある。しかし、安楽寺草創の伝説が牛眠地の故事に示唆を得たものであることは間違いないのではなかろうか」と指摘した。しかし、その説話が発想される前提として中国における「牛眠地」や「馬冢」という牛馬にまつわる「占墓」説話の存在を見逃すことはできない。むしろ、その動物の種類を越えた占墓説話の中から、丑年（八四五年）の生まれであることが大きな要素となって、「牛眠地」の説話が道真の磁石に引きつけられて「つくし牛」にまつわる話が発想されたろう。天神社の臥牛はもとより、牛に載る「天満大自在天神」や「日本太政威徳天」、さらに江戸時代の『菅家聖廟曆伝』に至っては、道真が死去する前に自分の遺骸を牛の車に乗せてその行くところにとどめよと遺言まで残したという。道真伝承の形成の根源に、動物が関わる中国の占墓説話が果たした役割の可能性は否定し難いものと考えられる。

## 第二部 馬をめぐる論考

### 聖徳太子の黒駒説話について—中国文献の受容と為政者像の形成—

聖徳太子が黒駒に乗り、浮雲を踏んで巡行する話は、『上宮聖徳太子伝補闕記』（以下『補闕記』と略す）にはじめて見られ、『聖徳太子伝暦』（以下『伝暦』と略す）にも類似する話が見える。この黒駒説話の由来に関しては、中村宗彦が、周の穆王の説話から影響を受けたという説を唱えている。しかし、中国の文献を調べると、駿馬に乗る天子は周の穆王以外にも、漢の武帝や唐の太宗などの天子と駿馬の説話が存在する。また、この説話のもつ意味は、かつて下出積与が「神仙類似のもので、この場合の神馬はあたかも彼の地における鶴や龍にも似た役割を演じている」と指摘したようなものであったか。この黒駒説話の意味を探求し、聖徳太子にどのような性格を付与するものかを考察する。

馬は、古い時代にあっては一国の軍事力や国力を左右する存在であり、漢の武帝が対匈

奴の戦略構想の中で西域に駿馬を求めたことは周知の通りである。武帝が「天馬歌」に詠唱した浮雲を踏んで飛翔する優駿の姿は、それを所有する天子の力をまた象徴するものでもあった。日本における聖徳太子の場合も、身分は帝王に異なるものの、その貴顕の身分に相応しい乗物としての形象の意図がうかがえる。『補闕記』には、太子が巡遊に御する愛馬の毛色を「烏斑」として「能飾四足（能く四足を飾る）」という。『伝暦』推古天皇六年（五九八）の条には、太子が全国に良馬を求め、甲斐国が献じた四脚の白い「驪駒」こそ神馬と見抜き、調子磨を飼養人に任じて、富士山・信濃・三越を巡行したことなどを増し加えている。太子はまさに「相馬」の眼力を備え、かつ調子磨の人材をも見抜く「伯楽」たる人物であり、太子が馬に乗って巡遊する行為はあるべき為政者の姿を象徴するに他ならない。その馬の「烏斑」や「驪駒」の属性に着眼すると、周の穆王の八駿に「盗驪」がいるものの、四脚の白い黒駒の形象は、唐の太宗が愛乗した純黒にして四蹄が白い「白蹄烏」に相応しいものといえる。この馬に騎乗した太宗は、人馬一体となって甘肅の薛仁果を破り、隴や蜀を平定する戦功を立てたことが知られる。そのモチーフに加えて、駿馬を見抜く眼力についていえば、その手引き書といえる『相馬経』が伝わり、古く湖南省長沙の馬王堆漢墓からも出土している。『史記』滑稽列伝には「相馬失之瘦（馬を相るに之を瘦に失す）」とあり、馬の「瘦骨」に騙されない眼力が必要であることを説く。

聖徳太子は甲午年（敏達天皇三年、五七四）の生まれで、厩戸皇子といい、黒駒に乗って天下を巡行する。『補闕記』に初出した黒駒説話は、『伝暦』により完成した形をとるが、その説話の形成には中国の帝王の説話を受容した跡を認め、中国の帝王と馬の密接な関係性を投射して為政者像を築いていることが分かる。当時の人々が太子を治世の聖人として敬慕し、理想的な君主像を描くべく中国の天子の故事を借り用いた形象化がなされたのではないかと考えられる。

### 第三部 羊をめぐる論考

#### 第一章『今昔物語集』震旦部卷九所載の羊転生譚の特徴について—説話類型の観点から—

『今昔物語集』（以下『今昔』と略す）震旦部卷九「孝養」所載の「震旦の韋慶植、女子の羊と成れるを殺して泣き悲しむ語第十八」と「震旦の長安人の女子、死にて羊と成りて客に告げたる語第十九」の二話は、親の金品を勝手に使った娘が羊に転生する話であり、来客用に準備された羊が娘の転生であった。前者ではそのことを知った母親と来客が助けようとするが、すれ違いから羊は殺される。後者ではそのことを知った父親が死を免じて、羊を寺に送る。その話容の異同を対比検討するとともに、両話が出典とする唐の王臨の『冥報記』の原話とも対比して、『今昔』が仏教的な教訓や信仰心を強調する潤筆の跡を追っている。

この二話については、澤田瑞穂が「畜類償債譚」の論考で、「畜類償債譚」の話型を「ある人が借金をして、それを返済しきらないうちに死亡する。冥罰を蒙り、今生で債主の家の牛・驢馬その他の家畜として転生、一定期間の労役に服し、それを労賃に換算して残額相当を償った後に家畜は死んで解脱する。この型の説話を筆者はかりに畜類償債譚と名付

ける」と定義して、『冥報記』に出典する『今昔』の二話を羊に転生した例として挙げた。しかし、『今昔』の二つの羊転生譚は、借金によるのではなく、両親の物や金銭を私用した罪で羊に転生するものであり、債主は他人ではなく、自分の肉親となる。これは二話の羊転生譚とその他の家畜の畜類償債譚との大きな相違点であり、二話の羊転生譚の特異なプロットといえる。

その異相を洗い出すとともに、この肉親間にまつわる話譚であることを重要視する。これを踏まえて、『冥報記』に取材すると同時に仏教的な教訓や信仰心を強調する潤筆を加えた『今昔』が、両話を震旦部卷九「孝養」の中に配していることに着眼した次章の考察に展開させる。

## 第二章 『今昔物語集』震旦部卷九所載の羊転生譚における「孝養」の意味

この二話の羊転生譚を収載する『今昔』震旦部卷九は「孝養」と題される。全四十六話中、すべての話が孝養譚の特徴を持っているわけではないと理解される。孝養譚をテーマとする話は、第一～十三話、第四十三～四十六話の話群に集中している、あるいは、第一～一二・二〇・四三～四六話の計十七話があるといった異なる見解がある。二話の羊への転生譚は、これまでの研究では、因果応報譚、畜類償債譚、畜類転生譚とされ、いずれの分け方にしても、孝養譚の範疇に入るものとは認められてこなかった。しかし、『今昔』が卷九「孝養」に編入する以上、「孝養」というテーマに何らかの関係性を持っていると考えられる。

中国においては、子羊が母の乳を飲む時には必ず跪くといい、その行為を通して、羊という動物が礼儀を知る存在であると見なされてもいる。『春秋繁露』（『芸文類聚』卷九十四「獸部」「羊」所引）には「羔飲之其母、必跪。類知礼者（羔之を其の母に飲むに、必ず跪く。礼を知る者に類す）」、『婚礼謁文贊』（『天中記』卷五十四所引）に「跪乳有敬（跪き乳するに敬有り）」などが見え、『玉堂閑話』（『太平広記』卷四三九所引）には屠殺されかけた母を守ろうと、刀を腹の下に隠して難を逃れさせた子羊の話も記される。羊が「孝」のシンボルとして定着することが窺えるが、『今昔』卷九のタイトル「孝養」の意味に関しては、これまで「養」という字に重きを置いた解釈が取られている。「孝」という概念には「孝順」「従順」の意味も含まれる。二話の羊転生譚は直接的に父母への孝養を言っていないが、「孝」がもつ「孝順」「従順」の意味を反面的に描いて、もし主人公の少女のように父母に告げずに物や金銭を取ってしまったら、畜類に転身してしまい、孝養をつくせぬばかりか、殺される可能性さえあると教え戒めたのではないか。二話の羊転生譚が『今昔』卷九「孝養」の範疇に収録される意味をここに求めることができる。その勝手に父母の金品を取り、父母への不孝によって羊に転生した結果として、孝養をつくし得ないとの教訓教戒的な孝養譚になるものと解される。

## 第四部 鶏をめぐる論考

### 第一章 鶏鳴と吉凶禍福—中国文学と関わりながら—

鶏の声が夜のとばりを破り、朝の到来を告げる。その鶏鳴をめぐる伝承は少なくなく、日本各地の伝説集には、元旦に鶏鳴を聞くと福德・長命を得る、一年幸福である、あるいは

は死ぬといった年占的な記載がある。その伝承の中の鶏は、「金の鶏」あるいは「金鶏」という色彩的特性を伴って表記される特徴がある。その「金」の特性について、柳田国男は「伝説の系統及び分類」で、長者が「黄金の塊の代わりに金の鶏を鑄て土中に埋めたとも伝へられて居る」伝説との関わりを示唆している。中国には、明の謝肇淛の『五雜俎』巻二「天部二」に、「歳後八日、一鶏（歳後の八日、一に鶏）」とあって、鶏が「猪、羊、狗、牛、馬」という動物に優先する存在であることが分かる。鶏鳴は年明けの象徴になり、旧年と新年の分界の意味をもち、一年の吉凶を占う年占の意味を付与されたと考えられる。

鶏鳴には吉凶の意味が混在したが、そもそも鶏鳴は聞いた人にプラスをもたらす。鶏鳴は中国最古のアンソロジー『詩経』「国風」の「齊風」「鶏鳴」や「鄭風」「女曰鶏鳴」にも詠まれる。明けそめぬ天に鳴く鶏の声は人々の眠りを覚ます。早起きは農作業と生活に深く関わる。鶏鳴は夜明けの時刻を知る手がかりとなる一方で、後世、その鳴き声とともに起きて剣を舞わせて鍛錬する「聞鶏起舞」の故事も行われた。『晋書』巻六十二に記す晋の祖逖と劉琨の武芸錬成による立身出世の話題である。その親友二人は真夜中に鳴く鶏の声（「荒鶏」）も不吉がらず、飛び起きて剣の練習に励んだと伝える。発憤奮励を象徴する語ともなっている。

何も見えない夜の闇の中にいる人間の恐怖と、夜明けの到来を待望する人々の強い思いが想像される。人々は鶏鳴に不思議な魔力を感じていたのかも知れない。

## 第二章 鶏鳴と太陽一記紀の「長鳴鳥」をめぐる一

鶏が鳴くと、夜の闇が薄らぎ、太陽が地平線から登ってくる。この毎日のように目にする自然界の光景から、鶏鳴と太陽をテーマとしたさまざまな話が生まれ伝えられてきた。その一例が『古事記』と『日本書紀』とに見える天照大御神（天照大神）が天の石屋戸（天石窟）に隠れた話である。そこには「長鳴鳥」が登場する。この長鳴鳥の高らかに響く鳴き声は、天の石屋戸にこもった天照大御神の話に重要な意味を持ったと考えられる。

中国には、天の石屋戸の話に似るものは見いだせないものの「長鳴鶏」という鳥の記事が古文献に見られる。『漢書』巻六十三「昌邑哀王」伝には「長鳴鶏」、『西京雜記』（『太平広記』巻四六一「禽鳥」二）には交趾（ベトナム・江西）・越雋（四川・雲南）から献上された「長鳴鶏」と「伺晨鶏」、『異物志』（北魏・賈思勰『齊民要術』巻六「養鶏」）には最も長く声も清朗で、潮水が夜満ちた時にも鳴く九真（ベトナム）の「長鳴鶏」などの記載がある。

のみならず『玄中記』（晋・郭璞、『芸文類聚』巻九十一）には、太陽が出て桃都山の大樹「桃都」を照らすと、この木に住む「天鶏」が鳴き、天下の鶏がこれに随い鳴くと記し、『春秋説解辞』（『太平御覧』巻九百十八「羽族部」「鶏」）にも「陽出鶏鳴（陽出て鶏鳴く）」と見えている。

太陽が出てから鶏が鳴くという中国文献に記される順序に着眼してみると、天の石屋戸の話では、太陽神である天照大御神が隠れたままの状態、長鳴鳥を鳴かせている。実はこれこそ思兼神の策略で、鳴き声を聞いた天照大御神は自分が石屋戸に隠れたま

ま長鳴鳥が鳴くことを不思議がってのぞき見て、結局は引き出されたと解釈できる。

孟嘗君が「鶏鳴狗盗」によって函谷関を逃れ出た故事を想えば、「鶏鳴」はとりわけ一種の詐術の趣きをもつ。明けそめぬ天を偽り、鶏鳴で明けたがごとく装う。記紀二書に記される天の石屋戸神話においても、その太陽の出現と鶏の長鳴との関係を逆手にとって、太陽の出現が無いまま長鳴させるトリックを創出している。しかも、そのトリックを増幅する笑いという人間に欠かせない要素を巧みに入れた話と考えられる。「長鳴鶏」などの中国文献からヒントを得た可能性は否定できないだろう。

## 第五部 犬をめぐる論考

### 第一章 水天宮信仰と中国（1）—瓢箪と水を中心に—

水天宮は水の守護神、安産の神として広く知られる。東京都中央区日本橋蛸殻町にある水天宮は名高いが、福岡県久留米市の筑後川畔にある水天宮こそが日本全国にある水天宮の総本宮である。寿永四年（一一八五）三月、壇ノ浦の戦いで、わずか八歳の安徳天皇が平家一門とともに入水した後、国母徳子に仕えていた女官あぜちのつぼね按察使局伊勢が久留米市へ逃れて、建久年間（一一九〇）に安徳天皇等を祭って祠を建てたのがそのはじまりとされているが、その原型は「アマゴゼン」という水神で、真辺仲菴が著した『北筑雑藁』には「水神にして能く水災を除く者なり」と記している。久留米の水天宮は、水難除けはもとより安産や子授などの信仰が極めて篤く、瓢箪の守りで知られる。

その瓢箪と水難よけの関わりについて、中国の説話を視野に入れながら考察してみると、古く『詩経』「国風」「邶風」の「匏有苦葉」には瓢箪が詠まれ、宋の朱熹『詩集伝』には「匏之苦者不可食。特可佩以渡水而已（匏の苦き者は食ふべからず。特に佩して以て水を渡るべきのみ）」との注が見える。瓢箪は水を渡るに際して浮き輪や救命胴衣のごとくに用いられ、「腰舟」と呼ばれたことも知られる。日本では、『日本書紀』卷十一「仁徳天皇」十一年の条に、茨田堤の築造に際して、犠牲となる杉子が水中に匏を投げ入れ、河神が真の神なら沈めてみせよと呪願したことが記されるが、『古事類苑』などを探しても瓢箪を使って水を渡る記述は見当たらない。ただ、渡河や水難除けなどに瓢箪を浮き輪として用いたことは生活の知恵として想像に難くない。

水天宮の瓢箪は日中に共通する土俗的な発想の中に位置し、平家滅亡の相承との関わりの中で、水神的ペルソナに、幼帝を祭祀しての誕育と幼童保護の習俗が増し加わったものと考えられる。

### 第二章 水天宮信仰と中国（2）—瓢箪と犬と誕育—

久留米の水天宮は、水難除けはもとより安産や子授など様々な利益があるとされる。東京日本橋の水天宮には、子宝犬と言われる母子犬の像があり、母犬が慈愛の目線で子犬を見守っているのが印象深い。戌の日に祈願すると安産である、妊婦が戌の日に腹帯を締めると安産であるというように、犬と誕育との深い関係を説いているが、瓢箪と犬が水天宮信仰と結びついた理由についても定説がない。

中国においては、瓢箪と誕育、犬と誕育がそれぞれに深く関わっている。瓢箪と水を中



心に水天宮信仰と中国との関わりを含めて第一章に考察を試みたが、さらに瓢箪と犬を中心に、中国の説話と関わりを見ながら水天宮信仰と中国の関連性について考察する。

瓢箪は古くから縁起の良い物であり、母体崇拝、祖先崇拝の対象でもあった。瓢箪と犬とは一見まったく関係のない存在ではある。しかし、とりわけ注目すべきは『後漢書』『玄中記』『搜神記』などに所載の不思議な犬「盤瓠」の話である。婦人の耳から出てきた虫を瓢の中に置いておくと人類の祖先とされる犬「盤瓠」に化したという。この犬の誕生自体が凡常でないが、その犬が自力で敵将の首を取るという勇敢な行為によって王女を妻にすることも更に不思議である。そして六男六女を生み、彼らは相互に結婚して「蛮夷」の一族をなしたという。

水天宮の縁起物の犬と瓢箪が、中国の「蛮夷」の起源説話の重要な要素とも重なる。瓢箪は子宮ともいえる特別な存在で、誕生に関わる。

安徳天皇を祭神にした所以は、わずか八歳で平家一門とともに入水した非命の最期にあり、かつ安徳帝が治承二年(一一七八)の戌年生まれであったことが大いに与ってしよう。かくて幼帝を祭祀した神格は、広く民草の子を守護し、水難から身を避けて生育を見守る神格を生み、引いては子を授け子を守る職能をも獲得したと考えられる。その神性は、犬と瓢箪に象徴されたといえることができる。

## 結語

いしがみなさや 石上七鞆の「日本人が動物に抱く印象と思想には、中国文化の影響が明らかに見て取れる。」(『十二支の民俗伝承』)との論述に疑問を持ったのが、本論文のテーマを決めたきっかけである。馬・牛・羊・犬・鶏の五つの動物にまつわる説話や伝承の考察を通して、確かに指摘の通り、日本人の動物に対する印象は、少なくともこの五つの動物に対しては中国文化からの影響を受けたことが見て取れる。将来的に動物の文化史的な概説を試みるとともに、十二支の動物全般に対する論考にまで延ばしていくことを願っている。

## 4 総評

「比較文学」の「比較」という語の意味は、曖昧な汎用性の中にある。その比べるという意味に寄りそいすぎると、その学問や研究は狭隘化して自在性を失いかねない一面も備えている。「比較文学」の学問領域は、題材としての文学対象を国際的な視野に立って相対的に見直し、その文学的な理解を多岐多様な方法によって解明していくという認識に立つものと考えられる。そこには、材源、受容、影響などの事実関係を積極的に追究するという研究の取り組みはもとより、あるいは直接には関係のない文化現象の対比的な考察や研究も含まれることはいままでのない。

本学位請求論文は「日中動物説話・伝承の研究—比較考察の見地から—」とのタイトルのもと、牛・馬・羊・鶏・犬の五つの動物を題材として日中の比較文学的観点から、日本における中国受容の位相を考究しようと試みたものである。牛における菅原道真の墓所をめぐる考察、馬における聖徳太子の天下巡遊と為政者像に関わる黒駒説話の論考、鶏における天

照大御神の天の石屋戸神話の読み解きに関わる論説は、いずれも日本の歴史文化に大きく関わる人物にまつわる題材であるだけに、その中国説話との比較考察はそれぞれにテーマとして醍醐味をもつ。老子の出関・化胡説に認められる青牛にまつわる伝説、周の穆王に加えて唐の太宗が愛乗した六駿の白蹄鳥の存在、天照大御神がいまだ天の石屋戸に隠れる常夜の中で鳴いた常世の長鳴鳥の役割。それらに着眼しての考察は、文献資料に向き合っただけの発想に支えられた成果といえる。とりわけ闇夜で鳴かされた長鳴鶏の鶏鳴を、孟嘗君の「鶏鳴狗盗」さながらのトリックと見た考察は従来にない新見地を提出している。また白蹄鳥の存在も、聖徳太子の為政者像の形象に有用な意味をもつだけに重要な指摘であると考えている。

羊における『今昔物語集』震旦部卷九「孝養」の羊転生譚への解釈、犬における葫蘆を介した水天宮の信仰への論及もまた積極的な試みである。澤田瑞穂が定義した「畜類償債譚」の枠組みにあって、その具体的な話型分析から変種としての意味を析出する。母の乳を跪いて飲む羊が礼儀を知る動物で、「孝」がもつ「孝順」の観念から『今昔物語集』における羊転生譚が「孝養」に属する所以を考察したことは視点的に興味深い。水天宮の信仰の源泉を考えるべく水と葫蘆と犬と誕育の関わりについて中国説話の観点から洗い出そうとする試みは斬新さをもつ。

ただ各動物に対する論考の中で、問題を焦点化して論述することに集中するあまり、その動物の属性や代表的な話譚などに関する大枠としての言及や考察に欠ける憾みがある。先行する文献資料の調査結果を織りこむ論述の方法も学んでいくことが期待される。「金牛」「銀牛」などの資料と地域、牛の引く車に乗る老子から牛に乗る老子像への変転、羊転生譚における『今昔物語集』の話末評語との関わり、ヴァギナシンボルを含む葫蘆の民俗の更なる考察等々、質疑応答の中から学問的な宿題も見えてきている。これらの諸点は、今後に向けての発展的な課題に関わるものであり、本論文の瑕疵となるものではないことを書き添える。

公開発表会（9月24日開催）では、本人のプレゼンテーションに続いて審査員との質疑ならびに来聴者からの質問が行われ、厳格な中にも有意義な研究交流の場が生まれた。その応答を含めて審査した結果、上述した通り、本論文が博士学位請求論文として相応しい内容を備えるものであることをここに報告する。

【以上】